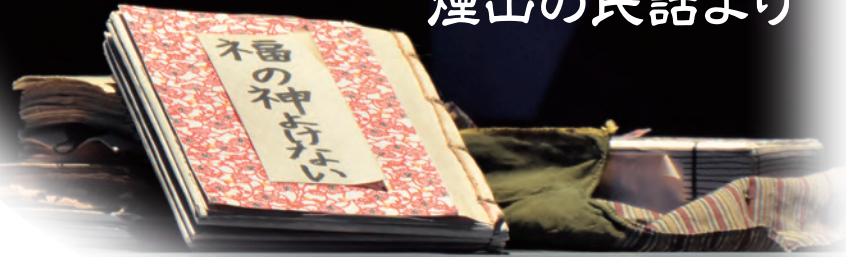


矢巾町民劇場第23回公演

福の神よけない しあわせはどこに 煙山の民話より



物語

大正13年。土淵村(遠野市)の村議である佐々木喜善は昔話の採集や研究に打ち込んでいた。喜善は煙山村の小笠原謙吉に資料を提供するよう依頼すると、資料を携えた謙吉が尋ねてきた。その資料の中には「福の神よけない」の物語があった。

ある年の暮れ。村人の佐兵は南昌山へ行き、門松用の松を採った帰り、笹淵を通りか

かると水が渦を巻いていた。面白半分で佐兵は松の枝を投げ入ると、淵の姫が現れ、松の枝をくれたお礼がしたいと話す。姫は淵の主である父から「何か礼に」と言われたら、「よけない」が欲しいと言いなさい」と佐兵に伝える。佐兵は淵の中にある立派な館に連れられ姫の父から歓迎を受け、姫に教わった通り「よけない」が欲しい」と言っていると、現れたのは汚い子どもだった。

立派なものを期待していた佐兵は、最初はだまされたと思っていたが、人目につかない場所に置くなどの掟に従うと米や銭がいっぱいになり、暮らしが豊かになる。佐兵が

留守中、部屋の奥で物音がし、佐兵の妻「なみ」がのぞいてみると、汚い子どもが飛び出し、驚きのあまり追い出してしまう。帰宅した佐兵は「よけない」がいけないことに気が付き、なみを問い詰める。なみは追い出した子どもが、福の神だということを知り、家に戻ってこない「よけない」を捜す。

一方、城下をさまよっていた「よけない」は米問屋「米清」の主人、清兵衛に救われ米清で働くことになる。福の神のおかげで米清は大繁盛。話すと効力がなくなる「よけない」は米清の人達に「ふくすけ」と呼ばれ、みんなに慕われる。「よけない」を捜し続けていた佐兵となみは、淵の姫の力を借り見つけ出し、淵へ連れ戻そうとする。ところが「よけない」は掟をやぶり「米清にいたい」と声に出してしまう。それぞれが見つけた「しあわせ」とは…。

脚本 GAKUJIN
脚色 矢巾町民劇場制作部
演出 佐々木絵梨子

町民参加による手作りの舞台「矢巾町民劇場」(金子卓嗣実行委員長会長)は第23回公演「福の神よけない しあわせはどこに 煙山の民話より」を2月9日・10日、田園ホールで上演。

今回の作品は、煙山地区に伝わる昔話にアレンジを加えた物語で、福の神「よけない」を通して「しあわせ」とは何かが描かれています。

総勢約100人のスタッフやキャストが参加し、約3カ月にわたる練習や準備を積み重ねて本番に臨みました。公演2日間で約600人が来場。感動あふれる物語と出演者たちの熱演に惜しみない拍手が贈られました。



子どもたちは山の妖精となり、可愛い踊りを披露！





1 煙山村の小笠原謙吉が「福の神よけない」の物語を語り始める



2 渦を巻いていた穴淵に門松用の松の枝を投げ入れる佐兵



3 お礼に福の神“よけない”を勧める淵の姫



4 淵の主がお礼としてよけないの証明書を渡す



5 福の神“よけない”には「人と話してはいけない」などの掟があった



6 夫の佐兵が帰ってこないことを心配する妻「なみ」



7 「おなごに見られてはいけない道具があるから開けるな」と念を押す佐兵



8 よけないの力で米や小判が増える



9 物音がした納戸を開けるとよけないが飛び出した。なみは驚いて追い出してしまう。



10 誤って穴淵の館に来たなみは姫からよけないの居場所が分かる絵図面をもらう。



11 「行くところがなければ米清に来ないか」



12 よけないをみつけた佐兵となみ。米清の主人は帰したくない思いをおさえて、よけないに帰るように伝える



14 「しあわせは心のあり方で変わる」暮らしが豊かになることだけがしあわせとは限らないと謙吉が話した。



13 「おら、ございてえ！米清のみんなと一緒にいてえ！」

福の神「よけない」を通して描かれるしあわせとは何か――。